

中山間地域の維持・活性化と協働

経済学部教授 小林伸生

国・地域を問わず深刻化する財政難や、少子高齢化の進展により、わが国の地域、とりわけ地方圏の中山間地域は、地域活力、さらには地域コミュニティ自体の維持においても難しい局面に差し掛かっている。国土交通省と総務省が平成18年度に行った調査の中でも、10年以内に機能の維持が困難な状態に陥る可能性のある集落が約9,000、消滅の可能性がある集落が約2,600に達するという結果が示されている（水谷利亮「限界集落」と地域づくりに関する事例分析」（高知短期大学『社会科学論集』97）。一方、中山間地域に関しては、食料生産や里山の維持管理など、国土保全や安全・安心な国民生活の維持のために欠くことのできない役割を果たしているといわれており、その担い手としての地域コミュニティの維持は、今後の重要な課題とみなされている。

上述のような問題意識を背景として、近年、持続可能な地域づくり、集落形成に向けた示唆を得るべく、事例研究を中心とした研究・提言が活発化している。上記水谷論文では、熊本県水俣市の「村丸ごと生活博物館」、京都府の「ふるさと共援活動」、および長野県阿智村の集落計画作りの活動を紹介・分析している。それらの事例分析のまとめとして、①集落住民が自分たちの生活や地域をどうしたいのかをイメージし、主体的に現状・課題を考え・議論すること、

②地域づくり計画を策定し、それに基づいた地域づくりの推進、③府県や市町村の組織的な支援、行政職員による人的サポート、④集落と都市との連携により、外部との協力・協働などの重要性を指摘している。阿智村の取り組みに関しては、同村の村長の岡庭一雄氏の講演「阿智村が全国に伝えたい「地域主権」論～自治と協働のむらづくり～」(岐阜経済大学地域経済研究所『地域経済』29)でも紹介されている。

小田切徳美「集落再生の新たな方向性を考える～西日本から東北へのメッセージ～」((財)東北開発研究センター『東北開発研究』156)では、西日本における新たなコミュニティの取り組み事例を紹介しつつ、新たな活力あるコミュニティが具有する性質を4つの観点から整理している。すなわち、①総合性（コミュニティが役場の総合性を兼ね備えている）、②二面性（コミュニティの活力維持の過程で経済活動に乗り出す）、③補完性（集落が守りの自治を行い、コミュニティが攻めの自治を行う）、④革新性（家父長中心の寄り合い組織における意思決定から、夫婦単位での参加・意思決定への転換）などの特徴を指摘している。その上で、集落再生の上では地域産業の構築の重要性を指摘し、第6次産業型経済、交流産業型経済、地域資源保全型経済、小さな経済（大幅な追加所得を追い求めず、着

手可能なことから実施していく)をキーワードとして指摘している。

一方、高齢化が進展する過疎地域においては、次世代を担う若年人口の確保も大きな課題である。石川雅信「子供の生育と地域社会～奄美大島の事例を中心に～」(明治大学政治経済学部『政経論叢』第78巻第3・4号)は、持続的に高い出生率を維持している奄美大島における子育ての実態を、フィールド調査から分析している。それによると、当地域では子育ての負担を親のみに負わせず、家族・地域・公共機関が連帯し支えあって子育てに参画する志向が強く、そのことが高い出生率と密接に関連していることを明らかにしている。

上記のような事例研究を見ていくと、地域コミュニティの持続的な活性化のために必要な共通要素として、地域づくり、町おこし、あるいは人材育成といった生活の諸側面において、住民の主体的な参画が存在することがわかる。また、しばしばそうし

た参画・協働の実現に向けた触媒として、自治体等の公的セクターが効果的に関与していることが伺える。

今回は主として中山間地域における地域コミュニティ活性化に焦点を当てた研究を見てきたが、実はこのような参画・協働による地域コミュニティ活性化の問題は、中山間地域に限定した問題ではなくなりつつある。今日、都市部においても高度成長期に急速に流入した世帯の高齢化などにより、地域コミュニティの果たすべき役割が再び注目を集めるようになってきている。コミュニティの活力維持の問題は、大都市圏にとっても「他山の石」ではなくなりつつある。高度成長期の大幅な人口流動が、都市部にも中山間地域にもコミュニティ維持の問題を投げかけつつある今日、事例研究、さらには、より実証的な研究の蓄積等を通じて、持続可能性のある地域づくりのための処方箋を、よりの確に描いていくことが求められる。

「講座・日本経営史」の刊行

商学部教授 木山 実

「講座・日本経営史」のシリーズが全6巻でミネルヴァ書房から刊行されつつある。執筆陣は主に経営史学会会員で構成され、2009年12月に第1巻がまず刊行され、第2巻以降も順次刊行中である（全6巻のうち2010年12月末時点で第4巻を除く全巻が刊行済み）。第1巻には『経営史・江戸の経験』の表題が付され、第2巻以降は、『産業革命と企業経営』、『組織と戦略の時代』、『制度転換期の企業と市場』、『「経済大国」への軌跡』、『グローバル化と日本型企業システムの変容』の表題が付けられている。つまり江戸時代から平成までの超長期スパンで日本の企業経営の変遷を俯瞰しようというシリーズである。

経営史学会の関東部会（2010年11月例会）と関西部会（同12月例会）では刊行済みの5巻分について書評会が行われ、私は関西部会で第1巻のコメントを依頼された経緯もあるので、この場を借りて第1巻につき、少しコメントさせていただきたい。まずは第1巻『経営史・江戸の経験』（宮本又郎・粕谷誠編）の章立て構成と執筆者を示しておく。第1章 総論（宮本又郎・粕谷誠）／第2章 市場と企業（宮本又郎）／関説 外国の会社制度（米山高生）／第3章 労働の管理と勤労観—農家と商家（友部謙一・西坂靖）／第4章 ものづくりと技術—連続（天野雅敏・山田雄久）／第5

章 ものづくりと技術—断絶（鈴木淳）／第6章 マーケティングと物流（上村雅洋）／第7章 金融ビジネス（粕谷誠）／関説 外国の金融経営史（寺地孝之）／第8章 経営主体の連続と非連続（谷本雅之）。

日本経営史のシリーズものは、1976年から翌77年にかけて日本経済新聞社から全5巻で刊行されたもの、1995年に岩波書店から全5巻で刊行されたものに続き、今回のものは3回目のシリーズであり、14～5年ぶりの成果ということになる。

第1巻の全体を貫くテーマは、「近世期の経営が、近代にどのように受け継がれたか、あるいは受け継がれなかったのかを明らかにすること」（291頁）にあるということになるが、1995年に岩波から出されたシリーズの第1巻である安岡重明・天野雅敏編『近世的経営の展開』と比べると、今回の第1巻は、商人史以外の分野に関する記述にかなり分量が割かれていることに気付く。その典型例は近世の農業経営史に関して記された第3章の友部謙一氏執筆部分であろう。その一方で、明治期会社制度の前史としての近世の資本結合・共同企業には、95年の岩波版第1巻に続き、相変わらず関心の高さがうかがわれる（第2章とその後ろの「関説」）。またこれは今回の第1巻に限ったことではないが、各巻に共

通して「関説」というやや分量の少ないコーナーが2本ほど設けられているが、それはそれぞれの直前の章について、欧米の経営史を専門とする執筆者が、日本と比較した視点で欧米での事情に説明を加えるというもので、このような海外との意識的な比較研究のコーナーが盛り込まれたのも今回のシリーズの1つの特徴となっている。

他に第1巻で気になった点も少し記しておきたい。まず第3章は上述のごとく農業経営史に多くの分量を割き、本巻でも際だった特徴を放つ部分であるが、近世の小農成立に関連して「鎌倉時代から江戸時代にかけて、家族という制度を必要とした事情は何であったのだろうか」(101頁)という興味深い問題を設定した上で、貫高制での貨幣経済事情(市場取引の費用がかさむ等)のなかで、「市場の失敗から身を守るために、農民は小規模な農家世帯を作り出し、さらにその集団のセーフティーネットとして…江戸時代における本格的な村請制への道が開かれたものと考えれば、当時の社会のダイナミズムがよくみえてくる。」との自説を展開されているが、貫高制や村請制など中世や近世史研究でも大きなテーマに関する大胆な説を展開されている割には、やや実証性に欠けるような印象を受けた。また第4章は近世から近代への連続性がみられた分野について酒造業・醤油醸造業・織物業・

陶磁器業を取り上げる一方で、第5章では逆に近世から近代への断絶面につき、製糸・紡績・造船・兵器・機械製造の分野をとりあげて説明がなされており、対照をなす2章といえるが、連続性を扱う第4章ではお雇い外国人ワグネルの指導で有田陶磁器業が近代化を図り、また断絶面を扱う第5章ではブリュナを雇い入れて富岡製糸場が設立・運営されるさまが記されているのであるが、この富岡の箇所などは書きようによっては第4章の連続性を説く章に入れてもいいように思われた。また第6章は江戸時代の商人の活動をマーケティングなどの現代的な用語で説明されているのが新鮮であり、江戸における引札を使った活発な宣伝活動の説明などは非常に興味深かった。

欧米との比較の視点で盛り込まれた「関説」の部分なども興味深いものがあるが、経営史学会関西部会の席上で橘川武郎氏(一橋大学教授)が「今後はアジアとの比較が1つのテーマになるだろう」という旨の発言をされた。確かに現在躍進目覚ましい中国や韓国(江戸期という意味では朝鮮)との比較が盛り込まれていれば、より興味深いものになっていたであろうと思う。

ともあれ今回のシリーズはかなりの力作ぞろいであることは間違いのないであろう。現在の経営史研究の水準を示すものとして、一読を勧めたい。